

イケてる
センセー!!
vol.20

自分の可能性を信じて努力することが進路を切り拓く。 大事なのは、「適性」より天職を探し続けること。

進路指導主事時代は主体的に進路を考える力をつけさせるため、キャリア教育の抜本的改革を実現し、現在は地域リーダー育成を目指す「地域探究の時間」に取り組む前田幸男先生。等身大で、全力で生徒に向き合う姿は同僚の先生たちにも大きな刺激になっている。



鳥取・県立
鳥取中央育英高校
企画研修部 教諭
前田幸男先生

profile

1976年鳥取県生まれ。鳥取・県立倉吉東高校卒。静岡大学理学部数学科卒業後、鳥取県立鳥取東高校、倉吉西高校で講師を3年間経験し、その後、正職員として倉吉西高校に勤務。2004年より現職。進路指導部に9年在籍し、そのうち3年間、進路指導主事として活躍。15年度から企画研修部に所属し、「地域探究の時間」を担当。教科は数学。常に携帯している赤いチェックの手帳には授業のスケジュール、欠席した生徒名、気になる生徒の様子などが細かく書かれている。

褒めることと壁になること。 それが教師の役割

鳥取中央育英高校へ赴任して以来、約10年、進路指導に携わってきた。「適性や、向き不向きで進路を考える風潮がありますが、それらがそんなに大切だとは実は思っていない。というのも私自身、教師という仕事に向いているのかどうかと聞かれても、いまだにわからないからです」

夢や目標を決めて頑張るのもいいが、自分に何ができるのかと模索し続ける人生もありではないか。いや、むしろ懸命にもがきながらそれを自分で探し続けることが進路を切り拓くということではないか。前田先生はそう考える。

「高校生が早い段階で進路を決めてしまうと、成長も夢もそこで止まってしまう気がして、ぼくはそれが怖いですね」

可能性は無限と気軽には言えないが、努力すれば何かできるという希望をもち、努力できる人間に育てたい。そのために教師ができることは何か。

「褒めることと壁になること。生徒一人

ひとりの伴走者として彼らの視点に立ち、一緒に勉強したり情報収集をして知識を深める。さらにその生徒の様子や状況を見定めながら、時には大いに褒める。壁というのはやる気を引き出すため、“今のままではお前に看護師は無理だ”とあえて言ったりすること。ただ、タイミングを間違えて半年、口を聞いてくれない子もいたりして。けっこう、失敗も多いので難しいのですが(笑)」

地元を意識を向けることを 視野を広げる機会に

進路指導主事のころ、前田先生は同校のキャリア教育、職業観育成を根本から改革し、生徒のモチベーションが上がるシステムづくりを実施した。

「『総合的な学習の時間』が学年ごとにブツ切れのカリキュラムになっていた。そこに、社会とのつながりのなかで自分の人生を考えるという一本の軸を作りました。1年の体験学習、2年の探究活動&志望理由書、3年の小論文という流れのなかで、自分がどう生きる

かを考える力を身につけられる内容にしました。これにより安易に妥協して進路を選ぶ生徒は減りました」

そして、15年度からは鳥取県の事業の一環として始まった地域リーダー育成のための「地域探究の時間」に取り組む。地元の有識者25名と連携して、1チーム6名の25班に分け、フィールドワークなどを通して鳥取県をさまざまな角度から分析・研究するというもの。

「地元を意識することで芽生える何かを期待したい。正直、まだ具体的にどんな成果が出るかはわかりません。ただ、社会を知り、視野を広げる機会になることは確かなので、キャリア教育にどう結びつけるかが今後の課題です」

さらに今、積極的に取り組んでいるのが教職員の労働環境づくり。「教師が元気にならないと生徒をやる気にさせる指導は難しい。どうも教師は忙しすぎて無理をしまいがち。もっと生き生きと働ける教員文化やシステムを構築したい。他校の先生とも連携し、超過勤務の縮減や労働条件の改善を、具体的に考えているところです」



2015年11月末に開催された「地域探究の時間」校内発表会。25班のうち、「都会から見た鳥取」のテーマで地域研究に取り組んだ班が代表に選ばれた。その班は12月5日、近隣の高校を招いて実施した「地域創造ハイスクールサミット2015」でも発表を行った。

fan message



前田先生は生徒への理解が深く、いつの間にか生徒の心をつかんでしまう魅力あふれる先生です。教科においても一人ひとりの理解度に合わせた的確に指導されているので、勉強になります。今、「地域探究の時間」を一緒に進めているのですが、資料の準備や連絡の手配がとにかく早い。その行動力、実践力も見習いたいです。(鳥取・県立鳥取中央育英高校 田中暁宏先生)